

結果は表3に示した。

採集個体はシャゴウが31個体であり、ヒレジャコ6個体そしてシラナミ2個体であった。平野のシャゴウは平均で、殻長 $3.0.8 \pm 3.4$  cm、白保のそれは $1.9.9 \pm 4.3$  cmであった。シャゴウが最も多かったのは調査地が生息適地であること、また本種は水中では発見しにくい外套膜の色をしていることに加えて、これらの3地点は従来のシャコガイ漁場から離れており、取り残しであることが最大の理由と考えられる。明石のヒレジャコはリーフフラットの枝サンゴの間で主に採集された。採集個体は保護水面区域内へ移殖した。

表3 シャコガイの生息状況調査

月日	場所	採集個体の種類と数	調査時間	採集人数
1982年(S57年)				
5月18日	平野	シャゴウ 9	2:15	3
			1:00	2
5月19日	明石	シャゴウ 13	3:30	3
		ヒレジャコ 6		
		シラナミ 1		
6月2日	白保	シャゴウ 9	2:30	4
		シラナミ 1		

### 5. シャコガイの種苗生産に関する試験

今年度は昨年度と同様にヒメジャコの種苗生産と大型シャコガイの1種であるシャゴウの種苗生産予備試験を行なった。

#### (1) ヒメジャコ

今年度は1982年(昭和57年)①7月13日、②9月16日、そして③10月23日に切り出しーアンモニア処理法で採卵した。幼生の飼育方法は前年度とはほぼ同様であり、①は母貝4個体(殻長8.80~10.06 cm)を使用して得られた38.8万個のD状幼生から受精後61~63日目の中間育成開始時には1mm前後の稚貝が7.4万個(19.1%)生残した。中間育成では、放流可能サイズ(殻長4mm以上)が出現した153~155日目の12月13日~15日では、6.3万個(16.2%)が残っており、中間育成開始時からの生残率は85.1%であった。②は母貝4個体(殻長9.72~10.76 cm)を使用し、112.0万個のD状幼生を得、その内90万個の幼生を飼育に使用した。受精後60~62日目で5.5万個(6.1%)が生残し、屋外での中間育成を11月15~17日に開始した。その後119日目の1983年(昭和58年)1月13日では4.7万個(5.4%)が残り、中間育成開始時からの生残率は85.5%であった。③は母貝4個体(殻長8.58~10.40 cm)を用い、58.7万個の幼生を飼育に供した。しかし前期飼育での生残が悪く、後期飼育に入ってから14日目で、生残率は6.0%(2.2万個)となった。その後も生残がよくなく21日目になって、その率は0.2%にまで減少し、共生藻との共生状態の成立もよくないので飼育を中止した。